

クロベエ

一心の出会い

〈出会い〉

そいつはでかくて、しかも真つ黒だった。体の割に小さい金色の目が、陰悪そうな光を帯びてこちらを睨んでいる。「いやな奴がいるな」。心の中でそう思った。

私は少し前に越して来たばかりで、猫を三頭連れてきている。中でもお宝は、カルロスという名の六歳のヒマラヤンだ。これだけは外に出すまいと思っていた。

しかし目の前に地面がある。俄然野性がよみがえったのか、外に出たがって大騒ぎ、一週間でこちら

が音をあげてしまった。外へ出してやるともう大喜び、いかにも気持よさそうに長いしつぽをはためかせて走り回っていた。

そんなある日、とうとう不安が的中した。三匹のうちの一匹、ノラクロがそいつと鉢合せした。二歳になっただけでも、家では一番年下で甘えん坊だった彼は、すっかりおびえてしまった。ただもう大声で泣きわめくばかりだ。庭の中だったし、私はすぐに駆けつけた。しかしそれより早く、カルロスが駆けつけていた。おびえている若い猫をかばうように、彼は二匹の間に割込み、真つ黒な野良猫をにらみつけ

今田 淳子

ている。そいつの方は、真っ白でふわふわした猫の突然の出現に驚いたようだ。一瞬ひるんだが、すぐに睨み合いが始った。

しかしその日は初めての出会いだったからか、それともそばで人間が睨んでいたからか、そいつはそのまま引き上げていった。それからはもう大変だ。ほとんど毎日カルロスはどこかしらケガをして帰ってくる。

「アイツはけんかの仕方まで汚い。所構わず噛みついてるじゃないか。」私は腹が立った。

しかし、カルロスはいつこうに懲りた様子もない。そういう相手だからこそいつそうファイトが湧くのか、毎日張切って飛び出していった。

しかし突然に、全く突然にカルロスが死んだ。外傷はなく、殺虫剤かなにかの毒にやられたらしかった。あまりにも突然で私はすっかり動揺し、その後何日も茫然としていた。

と、アイツがやってきた。濡縁に上がって家を覗

き込んでいる。

「あんな迷惑者は平気で生きてるのに、何でカルロスか。」私はよけい悲しかった。

次の日もそいつは覗きに来た。

「アイツはカルロスが死んだことを知らないのかな。」ふと思った。

「姿を見かけないから様子を見に来たのかな。とすれば、アイツにとつても戦う値打のあるライバルだったのかな。結構いいところあるじゃないか。」

カルロスを認めてもらったような気がして、今までのアイツに対する気持が少しばかり和らいだ。

カルロスが死んで三日ほどすると、ノラクロが外へ出かけるようになった。それまでは、アイツを怖がって外へ出ようとしなかったのに。

「お兄ちゃんがいなくなったら、僕がこのおうちを守らなければ、とでも決心したのかな。」私は思った。

それから数日もしないうちに、アイツの姿を見かけなくなった。そして、広い通りの向う側、次の町を走り回っているアイツを見かけた。

「アイツはノラクロの覚悟を知って、領地を明け渡してくれたのかな。」

また少し、アイツに対する気持が和らいだ。

ところがその半年後、ノラクロがいなくなってしまう。忘れもしない、十二月二十八日、あと数日でお正月という日の夜、食後の散歩といった感じでおかけたままいなくなってしまった。もちろん何日も捜し回った。でもどこにもいない。目が見え始めたころに捨てられ、人工保育で育った彼は、人間を恐れることを知らない。もしもだれかにつかまっていじめられていたら。そう思うと心配で居ても立ってもいられない気持だけれど、どうしようもない。せめて、いつお腹を空かせて帰ってきてでも食べられるようにと、夜は外に食事を用意しておいた。

ある朝、外に出てみると食事の皿が空っぽになっていた。ノラクロが帰って来た！ 私は大声でノラクロの名を呼んだ。しかし答えはなく、姿も見えない。がっくりして家に入ろうとしたとき、アイツの

顔が家の角から覗いた。ノラクロではなく、アイツが戻ってきたのだ。

私のがっかりした。またもや腹が立った。

「お前なんかにやるために置いといたんじゃないぞ。」そういう思いを込めて私はそいつをにらみつけた。

そして二三日は餌を置かないでいた。

しかしやはりノラクロのことが心配だった。お腹を空かせているのではないか、と思うと放つてもおけない。アイツに食べられるのを承知でまた食事を置いておくことにした。寒い季節だし、アイツもお腹を空かせていたのだろう。餌にありつけるとなると、日に三回も四回も来るようになった。そのいかにも嬉しそうな、いそいそとした姿を見ると、少しばかりかわいそうになった。そして、帰ってこないノラクロのためにはなく、そいつのために餌を置くようになった。

〈ふれあい〉

始めは、アイツも警戒をゆるめようとはしなかった。餌の入った皿を置いて、人間が家の中に入るのを見とどけてから、ゆつくりとその皿に近づく。いったん口をつけたら、それからもう大急ぎ、ガツガツとむさぼり食う。皿が洗ったようにきれいになったとたん、あつという間に姿を消してしまふ、というありさまだった。しかし一週間もしないうちに、三メートル位はなれていれば、人間が見ていても食べるようになり、また何日かたつと、すぐそばにしゃがんで見ても警戒をしなくなつた。そこで、もうさわつても大丈夫かなと頭に手をのぼした。甘かつた。野性とは何かを忘れていた。アイツは根っからの野良猫だったのだ。手を伸ばした瞬間、ガブツと来た。手を見ると穴が二つ、血がにじんでいる。これは化膿するな。手首まで腫れるかな、肘も腫れるかな、そんな事が頭をかすめた。アイツはと見ると逃げはいなかった。噛みついた途端に逃げ出そうと向うを向いたのに、そこでストップ。半

分はおびえたように、半分反抗的に、体を固くちぢめ、横目でじつとこちらの様子をうかがっている。げんこつやこん棒が飛んでこなかったのが不思議だったのかも知れない。

「そうだな、人間がこいつに手を出すときは殴るときだけだったはずなものな。私はそいつが少しかわいそうになつた。」

「そうだよ、お前はこわかつたんだよね。」私は優しい声でそう話しかけた。そいつはびつくりした。キョトンとした顔で私を見上げた。

「でもね、これはだめよ。ガブツはだめよね。」私は血のにじんでいる傷口を見せつけながら、そう付けくわえた。

「ナンカ ワカラン」そういった顔をしたが、とりあえずは殴られないらしい、と安心したのか座りなおして食事を始めた。

それから一週間ほどたつた頃、私はまた試してみることにした。

「オジチャン、おはよ。」最上級の優しさを込めて
そう声をかけながら、もう一度頭のほうへ静かに手
をのばした。

ガブツときた。ところが、である。そいつは自分
の本能に抵抗したのだ。キバが私の手の皮膚に触れ
た瞬間、そいつはあごに渾身の力を込めた。そし
て、キバはそこで止つたまま動かない。噛みつくた
めではなく、キバが手を傷つけないようにあごの動
きを必死で止めていたのだ。

その頑丈なあごがふるえるほどの力が、静かに消
えてゆくのを待つてそつと手をひっこめながら、今
度は私の心がふるえそうだった。

「こいつは私の心をつかてたんだ。私を傷つけて
はいけないと、こんなにかんばっている。」

感動しながらも、そいつが今までどんな風に人間
に扱われ、どんな思いで生きてきたかがわかったよ
うな気がした。

「よし、私だけでもこいつの味方になってやろう。」
私はそう決心した。名前も「クロベエ」と付けるこ

とにした。そのでかい顔といい、がに股で歩く姿と
いい、とてもとても「黒ちゃん」なんぞというかわ
い名前は似合わない。

その目をさかいに、そいつははっきりと私に対し
て親しみをを見せてくれるようになった。ところが、
である。クロベエは普通の猫とは甘え方が違ってい
た。ちょうどその頃、家では子猫が生れていたのだ
が、その小さな赤ん坊猫たちと同じ甘え方をしたの
だ。いかにもふてぶてしいドデカイ猫が赤ん坊と同
じしぐさをするのだ。何とも奇妙で、最初はどうな
つたんだろうと不思議に思った。

そして、ふと考えた。

いつ親から離されたのかは分らないけれど、彼の
心には、ホンの小さな頃にお母さんに甘えた思い出
しかないのではないだろうか。ましてや人間に優し
くされたこともなく、ただの甘え心で体をすり寄せ
ていくなんて事は一度もなかったのではないだろう
か。私は悲しい思いでクロベエの頭をなでてやった。

ある朝、裏口を開けると、待ち構えていたようにクロベエが隣の塀を乗り越えて小走りにやつてきた。と、ちょうど庭に出ておられた隣の奥さんが話しかけてこられた。

「人間も動物も、環境って大切なんですね。」

キョトンとしている私に、その方は続けて言われた。

「クロベエの目がすっかり優しくなりましたものね。以前はあんなにくたらしい顔をしてたのに。」

もともと動物好きだったからか、その方もクロベエの事を見守っていてくださったのだった。

不良だった自分の子供が、良くなつたとほめられたようで私はむしろ嬉しく、その日一日幸せな気分ひたっていた。

よその方にも認められて、私はますますクロベエがかわいらしく思えてきた。ご飯に来る度に話しかけ、頭や体をなでてやつたりしていた。彼の方もすっかりうちとけて、さわられても体を固くすることもなく黙々と食事をしていった。

そんなある日、食事に来る彼が足をかばっている。いかにも痛そうだ。ご飯を欲しがるのを待たせて足の裏を調べた。柔らかい肉のところはスッパリと切れている。少し前にも家の猫が同じ所を同じように切っていた。

「どこかにガラスか金属の破片でも捨ててあるのかしら。危ないな、人間の子供たちがケガでもしたらたいへんじゃないか。一体どこに捨ててあるんだろう。」

そういうものを捨てた人に少々腹を立てながら、クロベエの足に葉を付けてやった。それもおつかなびつくり、痛いと思つた途端にまた噛みつかれてはたまらないと、少し離れたところから葉をたらして消毒した。

二日ばかり葉を付けてやつて三日目だったか、食事に来たクロベエが私の足もとの地面に頭のでつぺんをこすりつけ始めた。でんぐり返りをして見せようというのかな。突然のことで、わけが分らずしばらく眺めていた。

その様子を見ておられた隣の奥さんがうれしそうに、

「まあ、そんなに甘えるようになったんですね。かわいがってくれる人が分るんですね。」と、言われた。

お隣の方が動物の味方でよかった。感謝の気持ちが湧いた途端、ハツとした。クロベエのしていることの意味が分った。クロベエはお礼を言っていたのだ。

猫がお礼を言うなんてと、ほとんどの方は思われるかも知れない。でも、私は見たことがある。それは猫ではなく、犬だったけれど。

姉の家にメスの柴犬がいた。賢いのだがメスだから用心深いのだろうか、私になかなかつかない。その犬が子供を産んだ。久しぶりに遊びに行くと、子犬たちは外で遊べるくらい大きくなっていて。ワンパク盛り、そこら中を走り回って疲れることを知らないみたいだ。その内、一匹が溝に落ちた。上がれないらしくキャンキャン泣いている。当然母犬は

すぐ駆けつけた。しかしどうしてやることもできない。ただその回りをおろと歩き回るばかりだ。でも、歩き回りながら私の顔を見ている。助けてやると言っているのだろうか。

私はそこへ行き、子犬を抱き上げて外へ出してやった。私が近づいたとたん、母犬は逃げ出して、離れたところで様子を見ていた。外へ出られた子犬はすぐにお母さんのところへすつ飛んで行った。母犬はそばに来て甘える子犬をさつと調べた。ケガがないと分ると、彼女は子犬の顔に顔を近づけた。子犬がこちらを見た。そして私のそばに走り寄り、足につかまって立上がるようにして顔を見上げた。二度ばかりそうやってから、またお母さんの方にかけて戻って行った。

母犬はその場にとどまったまま、私と子犬の様子を見ていたが、その目には今までのような警戒の色はなく、穏やかで優しい目になっていた。そしてその日以来、私を見る目はいつも優しくなり、そばに行ってもこわがらなくなった。

この小さな出来事は、犬がちゃんとお礼を言う事を知っているのだ、ということを示しているのではないだろうか。その上、子供にもちゃんとその躰をしてもいい。犬がお礼を言うのだから、猫がお礼を言ってもおかしくはない。私はその出来事を簡単に話し、だからクロベエもケガの手当のお礼を言っていると思う、と説明した。その方はびつくりし、「動物でも、こちらの心が分るとそんな事までするんですねえ。」と感慨深げに言われた。

その後もクロベエは、休む事なくご飯を食べに通ってきた。ボソボソの赤茶けた毛がすっかり黒々とつややかになり、風船のようにふくらんでいたおなかへこんで、クロベエはスマートになっていた。足が結構長いことも分った。

「今までふくらんでいたのは栄養失調だったからなのかな。」

そのかつこ良くなったクロベエを見てみると、他の野良猫たちのことがかわいそうになった。

「みんな栄養失調で飢死と背中合せて生きているんだろうな。捨てられた犬たちだって同じことなんだろうな。」

時折見かけた犬や猫たちの、やつれた姿が思い出された。自分の都合で飼っては捨て、産ませては捨てている人間の冷酷さを、人間の一人として犬や猫に謝りたいようだった。

ところで、クロベエとの信頼関係が出来上るのはそうそう簡単なことではなかった。どちらかと言うと、私の方が時間が長く掛った。

こんな事があつた。久しぶりに時間の余裕ができて、友人たちと一泊旅行に出かけた。泊りがけともなるとこれまた大変だ。猫たちには出入りできるように窓を一ヶ所開け、水とドライフードをたっぷり置いておけばよい。しかし犬は放しておく訳にはいかない。となるとトイレの問題がある。そこで、犬は獣医さんに預けることにした。それからもう一匹、障害猫がいる。これはおしりに麻痺があつて、

オムツを外せない。まる二日もオムツを取替えないなんてことはかわいそうすぎる。で、これもお願いすることにした。出発の朝、大急ぎでみんなに餌をやり、犬と猫を病院に連れて行き、それからやつと出発した。

気のおけない友人たちとのんびり楽しいひとときを過し、その楽しさの余韻を楽しみながら翌日の夕方帰宅した。家へ帰つてすぐに、猫と犬に餌をやつた。クロベエは来なかつた。もともと野良だし、私が留守の間はどこかで餌くらい見つけていたのだろうとさして気にも掛けなかつた。次の朝外へ出てみると彼が待っていた。もちろん、餌をやつた。

ところが、である。隣の奥さんが話して下さつた。「いくら待つても、何度呼んでも返事がないし、いないと分つたのでしょね。しょんぼりと首うなだれて帰つて行きましたよ。あんなふてぶてしい猫でもしょんぼりするなんてことがあるんですね。やつぱり頼りにしてるんでしょかねえ。」

誰でも自分の子どもが一番かわいい。私もその例

にもれず家の猫たちのことだけを考えていた。生れて初めて人間を信用しはじめたのに、その信頼を裏切つたようで私はすっかり後悔し、黙々とご飯を食べているクロベエの所へ戻つて背中をなでながらあやまつた。

私は猫や犬にあやまることがよくある。足元にまつわりついてくるので、しょつちゅう足を踏んづけたり蹴つとばしたりするからだ。踏まれたり蹴られたりしたとき、彼らはムツとした顔をする。で、「ごめん！」という訳だ。こちらの「ごめん」が通じているのかいないのか、彼らは余り表情豊かではないから分らないのだけれど、でもその後の態度から察するに、なんとなくこちらの気持は分つていようだ。しかもあやまつたからといってこちらを馬鹿にするようなこともない。(まあ、そこまでの知恵がないのかも知れないが。)そして彼らはいつも優しい気持で接してくる。だからこちらとしては、相手が分ろうが分るまいが、自分が悪い時はちゃんとあ

やまるべきだと思ふのだ。

ま、言訳はこのくらいにして、ともかく彼がどれほどこちらを信頼し、頼りにしているかが分つて、私も彼をもつと親身になつて世話してやろうと思ふようになっていった。

〈二期一会〉

クロベエは食べる心配がなくなり、居座つていても追い立てられることもない場所ができ、ほとんど一日わが家の庭にいるようになった。

ちやうどその頃、家で生れた子猫たちが外で遊び始めた。チビ猫たちは、その真つ黒な大きな猫にびつくりした。手のひらくらいの小さな体を精一杯高くし、毛を逆立てて「フーツ」と言った。

クロベエは頭を下げて相手の小さな顔をのぞき込み、そのままゆつくりと向うを向いた。

「おう、チビちゃんたち元気だな。」と、おじいさんが顔見知りの子どもに話しかけてでもいるような雰囲気だ。

まったく恐ろしきを感じさせない、穏やかなその態度に子猫たちも安心したのだろう。すぐにこわがらなくなり、クロベエのまわりをはね回つて遊び始めた。クロベエは子猫たちの遊ぶ様子を楽しんででもいるように、その騒ぎの真ん中でじつとうずくまつていた。

そんな平和な五月も過ぎ、六月に入つて雨が降り続くようになったある朝、ご飯を食べに来たクロベエは顔に大怪我をしていた。どんな大きな猫とけんかをしたのだろうか。牙でやられたと思われる大きな穴が頬の所に開いている。いつものような引つかさ傷やかみ傷どころではない。病院に連れて行くか。すぐにそう思った。しかし、もともとは野良猫だ。車に乗せたらこわくてパニックを起すかも知れない。この大きな猫がパニックを起したら、病院でも迷惑を掛けるかも知れない。そんな考えが頭の中を駆けめぐつた。とりあえずはこの猫の野性の回復力を信じることにしよう。そう決心して、ともかく

消毒だけはしてやった。

しかし彼の傷はやはり生易しいものではなかった。次の朝やつて来た彼の顔は二つ分かと思うほど腫れあがっていた。大きな二つの穴は開いたままだ。その穴へもう一度消毒薬を流し込んだ。三日目、やはり二つ分の顔をしたままやつて来た。頬がそんなに腫れているのだから、口を動かすのさえ痛くてたまらないだろうに、彼の食欲は落ちていない。いや、そういう大怪我だからこそ体力を落さないために必死で食べているのかも知れない。私は野性のしぶとさに舌を巻いた。しかし困った。傷口がふさがっているのだ。けれど消毒薬を流し込んでやれない。また傷口が開くのを願いながら、とりあえず外側に薬を塗っておいた。

それから二日くらいたった。その日も雨が降っていた。びしょぬれになりながらやつて来たクロベエの顔はまだ二つ分の大きさだ。しかし傷口が開いている。さつそく薬を塗ってやろうとさわった途端、

傷口からピンク色をした汁がゴボツとこぼれた。まるでいちご牛乳のような汁だ。傷の中が化膿していたところへ雨が流れ込んだのだろう。血うみが雨で薄められて頬の傷の中いっぱいになっていたのだ。

私は大急ぎでコトンを大きくちぎると、残りの汁を押し出し始めた。ゴボツゴボツと汁はいくらでも出てくる。恐ろしくなつたが、少しでも残っていたらまたその菌が繁殖して化膿してしまう。痛くないようにそうつとそうつと押し続けた。それでも汁が少なくなると痛んできたのだろう、クロベエは「ガウツ、ググツ」と小さくうなつて少し後じさりした。

我が家の猫たちなら、うなる前に私の手を払いのけようと、それこそもう力一杯引つ掻いたり蹴つ飛ばしたりするのだが、クロベエは一切そういうことをしようとしなない。うなりながらも、少し後じさりしながらも、足を踏ん張つてその痛みに耐えている。足の裏を切った時のように、私とその傷を治してくれると信じているのだろうか。

それにしても、人間でも我慢するのが難しいのに、見上げた奴だぞ。私は内心感心しながら治療を続けた。

傷口がふさがってはまた開いて、汁を押し出すことを二〜三回くり返してから、ようやくと怪我が治った。人間を見ればにらみつけるふてぶてしい野良猫が、本当は、人間でも滅多にお目にかかれないような立派な心根をもっていたことは大きな驚きだった。

こんなに優しくて賢い猫を、世話してやれてよかったとつくづく思い、もうだいぶ年をとっているようだし、最後がみじめにならないようにみとつてやろう、とさえ思い始めた。

暑い夏も無事に過ぎ、気持のよい秋になった。外から戻り家の近くまで来たとき、クロベエを見かけた。ひよろ長い若者がクロベエを追いかけている。数ヶ月前に我が家に迷い込んできた猫だ。もうそろそろ一歳、しつぽも体もひよろ長いやせつぽち

の子猫も大人になる年頃だ。しかし、オス猫同士の間いというほどの迫力はない。クロベエの方はこわがったり怒ったりしている風でもなく、けんかを避けるために小走りで逃げているといった様子だ。

「あ、うちの猫と知ってけんかを避けてるのかな。それにしても、あの子猫ももう一匹前の大人になったんだな。」と、そんな事を思いながら通り過ぎた。

その時以来クロベエの姿を見かけない。いったいどこへ行ってしまったのか、近くの町でも見かけることもない。

あれからもう数年、穏やかになっていた目はまたきつくなつてはいないだろうか。食べるものがなくてまたブクブクになつてゐるのではないだろうか。やつと好きになり出した人間に、また棒で叩かれたり水をぶっかけられたりしてないだろうか。時々心配になる。

(いまだ　じゅんこ)